研究発表要旨

「クリスティナ・ロセッティの抒情詩にみる仮定法の機能」

藤　田　晃　代

英語学習者にとって重要かつ「難関」といわれる文法項目のひとつ、仮定法はしばしば「事実と反対のことを仮定して述べる方法」というひと言でまとめられがちであるが、英文学作品においても多様な場面で用いられており、文学における語りの場面で特に効果を発揮している。19世紀イギリス、ヴィクトリア朝の詩人、クリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-1894) の詩を仮定法の機能から読み解くのが本発表の試みである。クリスティナの詩作品のうち、一人称の語りによる抒情詩を取り上げ、法助動詞 (modal auxiliary verbs) に着目しながら仮定法による語りの効果について考察する。本発表ではまず、クリスティナの抒情詩に直説法から仮定法への語りの転換が起こることを指摘し、主に直説法による語りは語り手がその心情や「現実の認識」を直接的に表現するものとして機能する一方、仮定法は語り手による「願望」や「現実からの逃避」のみならず、直説法同様、語り手が現実を認識していることを裏づける結果ももたらしている点を明らかにする。また文学研究の発表であることを踏まえ、クリスティナがとりわけ抒情詩を中心に詩作をした1850年代の作品にみられる主題、愛と死、離別、喪失といった各主題の扱いに関する問題と絡めて考察していく。

連続シンポジウム「英米文学・文化と人種・民族の問題Ⅰ」

本シンポジウムの趣旨

コーディネーター　吉　田　一　穂

今やグローバル化に対応するため、正確な英語の習得だけでなく、国際感覚を身につけることは、当然のこととされる時代となった。国際感覚を身につける上で、異文化を深く理解することは必須事項である。異文化理解の中には、人種や民族についての理解も含まれる。

1974年第18回ユネスコ総会は、「国際理解教育・国際協力および平和のための教育、ならびに人権および基本的自由に関する教育についての勧告」を採択した。この勧告では、世界人権宣言に示された教育の目的を冒頭に掲げた後、教育政策の原則として7項目を提示した。これは、現段階におけるユネスコの基本的な考え方を示すものである。その中の第二項目は、「全ての民族、その文化・文明・価値および生活様式に対する理解と尊重」であり、第三項目は、「諸民族および諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの認識」である。

これらの項目は、ユネスコを核とした国際理解教育の目的と使命、すなわち、「自給自足を失い、他国との協調連帯なしには存続することが不可能になっている国家という現実に立脚しつつ、世界の平和と人類の福祉を達成しようとする現代世界の根本問題に貢献しようとすること」と深く関わっている。

このような国際的な認識に立って文学・文化研究の中で人種・民族の問題を考えることは、非常に有益であると思われる。世界ではいまだテロや紛争の脅威はなくならず、人種差別が依然として残っている。一方で、最近の話題として、英国では、ヘンリー (Henry) 王子が白人の父親とアフリカ系の母親を持つアメリカ人メーガン (Meghan) 妃と結婚したことが記憶に新しい。英国王室が彼女を暖かく迎え入れたことに時の推移を感じ取ることができる。

人種・民族に関する意識がますます高まっている現在、このテーマを扱うこ

とには大きな意味がある。また、人種・民族に関する作家の見解や文化の中での見解を鮮明にするというメリットもある。そこで、このテーマに関心のある者がそれぞれの観点から人種・民族の問題を論じることとなった。会の性質上、英米の言語や文化を基調としたものを扱うこととする。（このコンセプトは一応の目安となるものであるが、内容は自由で、「人種・民族」を彷彿させる全てを含むものとする。）有益なシンポジウムとなることを祈っている。

（「平等」や「移民」や「文化的特徴」などをキーワードに、2020年9月に東京の年次大会で行われるシンポジウム「人種・民族Ⅱ」と連携して共著企画を模索中である。2020年9月に関西支部でも「人種・民族」に関する例会が行われる。共著企画は自由参加。）

発題者1

「*Oliver Twist* —反ユダヤ主義とフェイギン」

吉　田　一　穂

18世紀後半と19世紀初頭のロンドンにおいて、ユダヤ人は犯罪者として顕著な存在であった。ジョージ王朝時代 (1717-1830) のロンドンにおいて、ユダヤ人は、にせ金作りや盗品故売人として顕著な役割を果たしていたようである。チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の *Oliver Twist* (1837-39) に登場するフェイギン (Fagin) は、しばしば反ユダヤ主義のステレオ・タイプと考えられる。

見落としてはならないことは、ロンドンのユダヤ人と19世紀の犯罪社会が、大衆の意識の中で結びつけられるようになったことである。それは、悪名高きユダヤ人犯罪者たちがいて、彼らが関係する中古品の商いがあったので、ユダヤ人たちが盗品をやすやすと扱うことができたという背景と関係がある。反ユダヤ主義のステレオ・タイプの原型として取り上げられるのが、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の *The Merchant of Venice* (1596) に出てくるシャイロック (Shylock) である。

シャイロックとフェイギンは、作品の中で同様に扱われているのであろうか。本発表では、歴史的背景を概観し、作品の中で両者がどのように扱われているかを考察することにより、フェイギンの描かれ方の特徴を提示できればと考えている。

発題者2

「イギリスの民族及びその階級社会について—ジョージ・オーウェルを元に考察する」

大　石　健太郎

ご承知のようにジョージ・オーウェルという作家はその作品『1984年』と『動物農場』の二作によって世界的に有名な作家となりました。然し私はオーウェルの本質はこの有名な二作にあるのではなく、彼の初期の作品、所謂「ロンドン・ノベル」と呼ばれる作品群のうちにあるものと考えています。彼の処女作『ビルマの日々』は素晴らしい作品で私は英文学中の白眉だと考えていますが、この作品のことはまた別の機会にお話しましょう。今日は彼が一番こだわっていた階級制度の世界についてお話しようと思っています。彼の第二作『牧師の娘』、第三作『葉蘭を飾れ』、第四作『空気を求めて』で彼が開陳する世界が彼の言いたいことだったと私は考えています。ご承知のようにイギリスという国は階級社会の問題を除外しては語れません。もちろんオーウェルも

この枠を出ることは出来ませんでした。
　彼は自分の所属する階級を‘upper-lower-middle-class’ だと言っています。出自は上流階級ながら、金銭的には貧乏で、窮乏生活を余儀なくされる階級、しかしそれでいながら人前に出るときはその階級に相応しく身なりを整えねばならないというジレンマがあります。言ってみれば明治維新時の元武士階級をご想像下さい。日頃は刀剣、家財を質屋に入れて身過ぎをしながら、ことあるときはそれを請け出し、身なりを整えねばならない身過ぎ世過ぎの階級です。
オーウェルはこういった生活環境に我慢できなかったのでしょう。もちろん彼の本音は上昇志向にあったのでしょうが、これは果たせぬ夢でした。彼は反対に墜ちるところまで堕ちようと試みました。これが彼の『パリ・ロンドン放浪記』、「ホップ摘み」の世界でした。それから彼は前記三作の小説を書きました。そこには人には言えないような世界がありました。彼の苦悩時代でした。
　今日はこのイギリスの階級制度について話を進めたいと思っています。
　そしてこの理不尽とも言える階級制度のよって来たるところ、について私なりの知識をご披露したいと思います。 以下は図表です。

１．イギリス人民の社会構造
◆**上流階級：3%**——貴族（競馬場、夜会、狩猟、スポーツ、茶話会＋豪邸、別荘、膨大な資産を持つ。しかし一朝ことあれば民衆の盾となる人たち）
◆**中産階級上層の上：10%**——准男爵、ナイト、エスクワイア、ジェントルマン、陸軍将校（含む従軍医）、貴族の係累、著名人、高学歴者（学士、修士）、高級官吏）
◆**中産階級上層の中：10%**——下級官吏、海軍将校、兵士､退役軍人、牧師、法律家、医師、芸術家、自作農､大貿易商、大銀行家
◆**中産階級上層の下：10%**——中小貿易商、銀行員、借地農、土木建築業者、造船業者、船主、産業資本家、製造業者、卸商、倉庫業者、船員、小売商、衣料品加工業者、事務員、宿屋､装飾品製造業、教員、非国教徒聖職者、演劇・音楽関係者、精神病院経営者、
　◆**中産階級中層・下層：各30%**——サラリーマン中心、給与、収入による階級差別
◆**下層階級：7%**——肉体労働者（土木作業員、鉱山業従事者、鉛管工）、浮浪者、あぶれ者、売春婦、被救済民、精神病院入院患者、囚人

２．言語の違い
◆ 貴族社会：キングス・イングリッシュ（明瞭、大声）
◆ 中産階級の上：BBC英語 （ぼそぼそと喋る人、小声で喋る人多し）
◆ 中産階級上層の下になると日常会話はほとんどがコックニー
３．階級差の対応
◆ **洋服屋の話**——オーウェルの父の洋服屋店主に対する態度、洋服屋のアブリルに対する腹いせ
◆ **梯子事件のこと、本屋の客層について、食事のマナーについて、女性との交際について**

４．イギリスの学校制度について
　⇒ イギリスの教育制度は衆愚政治だ!・・・いかにしてエリートを作らせないか

義務教育の選択制度
◆ プライマリー・スクールとプレップ・スクール
◆ イレブン・プラスという試験制度、6／5／3／3制（戦前の日本の教育制度に同じ）
◆ オーウェルのパブリック・スクールの奨学金獲得への苦闘、イートンでの成績発表、イートンでのカレッジャー（奨学生）と通学生（オピダン）との差別葛藤、環境、肩書き、待遇

発題者3
「作者オーガスト・ウィルソンと作中人物マ・レーニーとの距離感：
アフリカン・アメリカンのアメリカでの立ち位置に関して」
伊勢村　定　雄

オーガスト・ウィルソン没後14年が経とうとしている現在でさえ、アフリカ系アメリカ人を取り巻く状況は根本的に変わらず、差別の噴煙が立ち上がるのを定期的に目にする。こうした状況をオーガスト・ウィルソンが生きていたら、どう見るのだろうか。

彼は亡くなる直前までほぼ百年にわたるアフリカ系アメリカ人の歴史を、一連のサイクルドラマとして書き上げようとしていた。また一方で、彼は作品だけでなく、講演、インタビューなどを通して、アフリカ系アメリカ人の生き方への言及をやめなかった。そうした姿勢は初期の作品にも表れていたが、作品としての面白さが勝っていたためか、彼の主張の一部としてのみ見られた可能性も考えられる。

本発表では、初期の作品の中でもとりわけ彼の主張が最も自然に、かつ激しく表現されている『マ・レーニーズ・ブラック・ボトム（マ・レーニーの黒い尻）』をとりあげ、ブルースの女王として生きたマ・レーニーに語らせているものと、その限界とは何かを考察し、オーガスト・ウィルソンの初期の問題意識を再検討する。これとオーガスト・ウィルソンのインタビュー・講演などの発言を比較・検討しつつ、アフリカ系アメリカ人作家であるという彼の現在的存在意義に迫りたい。

発題者4
「歴史と民族意識が招いた韓国の英語事情—日本人英語からの脱却」
伊　藤　由起子

韓国が国策として英語教育に取り組んでいることはよく知られた事実である。国から援助を受けて教育目的のアプリを開発する　neuronetism　の研究員 Joo-Hyen　Park　氏によれば、韓国人の英語は「とても良くなっている」といい、それは「日本人の英語の影響を受けない」ということを意味しているという。韓国には「朝鮮純血主義」という言葉があるほど外国人に対する差別意識と自国民としての優越感があり、反日感情も強くあるが、英語事情に関しては、日本から大きな影響を受けてきた。それは、大きく3つに分けられる。1つは、日本統治下の時代において、日本人の英語から影響を受けたこと、2つめは、日本人と韓国人の婚姻によって、その子供が日本人の英語の影響を受けたこと、3つめは韓国の翻訳事情である。韓国人は欧米の文化を取り入れる際、日本で英語から翻訳された日本語の書物を韓国語に翻訳してきた。その際、多くの和製英語が韓国語に流入した。しかし、グローバル化の推進のため、国を

挙げて英語教育に取り組んだ結果、韓国人の英語は「とても良くなっている」。本発表では、この経緯について具体的に発表したい。